

書簡

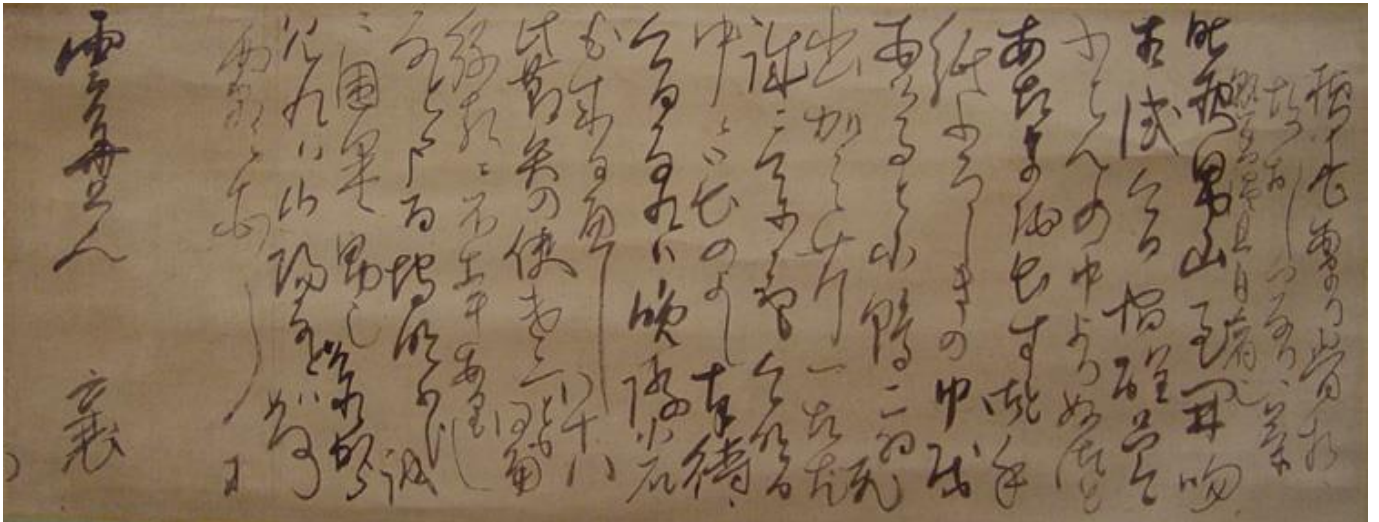
頼山陽

制作年：江戸後期

サイズ：15.6×41.0cm

材質：絹本墨書

所蔵：中津市木村記念美術館



横巻あまり骨折候

故、おしくなり候、茶

熟香温且自看也

昨夜男山至開吻

相試今日宿醒口今

ふとんの中よりめごと

あたまを出すと御手

紙ふうしきの中を

あけると小鴨二羽飛

出、加芹一たば

誠ニ忝存候、今明日

中ニ御出のよし奉待候、

今日なれば晩際小石

も来るべし。八十八

此節矢の遣候へども何角

縁類ニ不幸ありし

など、申而埒明不申、誠

ニ因果候男也。それから

見れば山陽など如何

頓首
襄

雲華上人

本文：上記

箱書：表「山陽簡牘 雲華上人宛」

1996(平成8)年に中津市に寄贈

頼山陽（らいさんよう、安永9(1780)～天保3(1832)）は江戸後期の儒学者です。大阪に生まれ、名は襄、通称久太郎、別号三十六峰外史といました。父春水と広島へ出、江戸で儒学者尾藤二洲に学びました。京都に「山紫水明処」を営み、多くの文人と交流を持ちました。また、雲華上人と共に山国地方を訪れ、「耶馬溪」と名付け、その景色を「耶馬溪図巻」に収めました。雲華上人は山陽がまだ無名の頃からの良き理解者でした。著書に「日本外史」「日本政記」「日本楽府」「山陽詩鈔」などがあります。